

山形県遊佐町における町民参加によるビデオ作品の共同制作

Making a promotion video for Yuza town with the people of the town.

加藤 到
KATO Itaru

I was commissioned to make a PR video from Yuza Town, a town at the foot of Mt. Chokai, located in the northernmost in Yamagata Prefecture on the border with Akita Prefecture, and instead, suggested that the townspeople themselves make the video at regular held video workshops.

The monthly video workshops with 15 male and female participants of all ages made a great success beyond expectation.

After the video was finished, the participants' boundless zeal for video making makes sequel video workshops and now their next work is under way.

This is a report on the workshops and study of video literacy and the coming visual communicating society.

目 次

1. 遊佐町からの依頼
2. ワークショップの可能性
3. ワークショップの実際（第一期）

1999年6月から2000年3月まで

- (1) ワークショップに集まったメンバーたち
- (2) 使い捨てカメラ（レンズ付フィルム）による遊佐町コレクション
- (3) キャンプ場での、手作りスライド
- (4) 歌人、鳥海昭子さんへのインタビュー
- (5) プレミアによる、ノンリニア編集
- (6) 「108人の笑顔」上映

4. ワークショップの実際（第二期）

2000年4月から2001年3月まで

- (1) ワークショップの継続と、ドキュメンタリー映画祭に向けて
- (2) 参加者たちへのインタビュー
- (3) ピンホールカメラの製作と、撮影、現像
- (4) 鳥海山365日と360度

5. そして、ワークショップはまだまだ続く
6. 映像リテラシーと地域興し

1. 遊佐町からの依頼

遊佐町広報担当者から、私のところへ遊佐町の観光宣伝用プロモーションビデオの制作依頼があったのは、1999年の春のことだった。遊佐町町政45周年企画のひとつとして、ずいぶん前に作った町の紹介ビデオを新しく作り直したいと言う。

早速、古い紹介ビデオを借りて見てみたが、予想どおり、ありきたりの観光スポット紹介に終始した映像は15分程の短さにもかかわらず、退屈な印象をまねがれなかった。

遊佐町は山形県の最北部に位置し、西は日本海、東は鳥海山を県境にして秋田県と接する、自然環境に大変恵まれた風光明媚な土地柄であり、この大自然をかつてNHKが何年もかけてハイビジョンに収め、すばらしい記録映像を作り上げたりもしている。

2000年の春までに新しいビデオ作品を完成させろと言われても、正直言って、限られた制作予算の中で、どうあがいてみても、古い紹介ビデオが多少小奇麗に生まれ変わる程度の中途半端な作品になってしまうのではないかというのが、私のその時点での感想だった。

2. ワークショップの可能性

現状でそのままビデオ制作の仕事を引き受けてもお互いに満足な結果を生むことは難しいだろうと判断した私は、町に対して、別の形での映像制作のアイデアを提案した。

それが、町民を対象にしたビデオワークショップを定期的に開催し、そのワークショップの参加者たちが、自らの手による遊佐町紹介のビデオ作品を作り上げるというものだった。

私は以前から、国内外の美術館や芸術センターなどでビデオワークショップを開催してきた経験があるが、そのたびに感じるのが、「ワークショップ」とは共同作業の一形態なのだとということであった。

「ワークショップ」という言葉は一般的には、カルチャースクール等での、何々教室といった、「教える」「教えられる」という関係を指し示すことが多く、創造的な集団制作をワークショップと呼んでいるケースは数少

ない。しかし私は近代社会の根底となる「個人」というキーワードをもう一度疑ってみる立場から、或いは、ポスト近代としての現代芸術の可能性を模索しようとする時、「ワークショップ」という言葉を「教える」「教えられる」の関係性から解放し、新たな共同作業による芸術創造形態のひとつとして位置付けたいと考えていた。現代芸術に於いて、「パフォーマンス」や「インスタレーション」といった言葉が、その芸術スタイルの名称として市民権を得たように、「ワークショップ」もまた、新しいスタイルの共同作業から生まれる創造活動を指し示す言葉として扱いたかったのだ。

遊佐町におけるビデオワークショップが、単に、私から町民へのビデオリテラシーの伝授には終わらず、私も一人のアーティストとして参加する共同創造活動になることを希望しての提案であった。

私からの逆提案を快諾してくれた遊佐町は早速、町の広報誌に参加者募集の記事を掲載し、あっという間に15人程の参加者が集まり、99年6月、第1回目のワークショップが遊佐町中央公民館を会場に開催される運びとなった。

3. ワークショップの実際（第一期）

1999年6月から2000年3月まで

（1）ワークショップに集まったメンバーたち

第1回目のワークショップに集まったのは13人。短大を卒業したばかりの母母さんから、定年退職後にビデオ撮影を趣味としている遊佐町きってのビデオマニアおじさんまで、様々な年齢層の男女が集まってくれたが、その中でも特に目を引いたのが40から50歳代の元気な女性たちの存在だった。彼女たちは、おおむね子供を育て上げ自分自身のための第2の人生を歩き始めている女性たちで、既に地域興し活動のためのグループを結成して積極的に活動している仲間たちであった。正直言って私は当初このにぎやかな女性たちには驚いてしまった。何しろ、私が一言質問を投げかけると、全員がいっせいにしゃべり出してしまい、その後しばらくは、いったい話を聞いているのは誰なんだろうといった状態が続いてしまうのだ。ふだんは大学のゼミで学生たちに対し、もっと積極的に自分の意見を発言してほしいと思いながら授業をしている私は、あまりの違いにとまどってしまっていた

のだ。しかし、彼女たちの情熱と行動力は、その後現在にいたるまでワークショップの中心的パワーとして、欠くことのできない存在となっている。

（２）使い捨てカメラ（レンズ付フィルム）による遊佐町コレクション

さて、メンバーは集まったもののワークショップのためのビデオ機材が初めから整っていたわけではない。自分でビデオカメラを所有しているのは２人か３人、後はビデオカメラに触ったこともない人たちがほとんどなのだ。当然、人数分のビデオカメラを用意することが出来れば、その使い方から始めるのがワークショップの常道だろうが、そうもいかずに、苦肉の策で用意したのが１台１,０００円ほどで買える使い捨てのスチールカメラだった。

「この使い捨てカメラを使って、遊佐町の好きな所と嫌いな所を撮影してきてください。」という最初の課題に挑戦することになった。

翌月に開かれた第２回目のワークショップでは、各自が撮影しサービス版にプリントされた写真を見ながら、遊佐町の良いところ、悪いところについて話し合うことになったが、この体験は、参加者たちを勇気付け、特に手探り状態であった私は大きな手ごたえを感じ取ることが出来た。というのは、各メンバーが撮影した写真は、写真の出来栄えという意味に於いては、使い捨てカメラによるスナップショットという限界を超えるものではなく、それなりに、ありきたりの風景が写されていたものがほとんどなのだが、その写真について説明する口調がとても熱っぽく、説得力を持って訴えかけてくるのだ。特に印象的だったのは、４０代の男性が撮った鳥海山の写真だった。青々とした水田の背後に、まだ少し雪をかぶった鳥海山が映っているこの写真は、観光絵葉書ほどの美しさは無いものの、あんなカメラでも結構きれいに撮れましたねえと、思わずほめたくなる出来栄えであったが、そんなことよりも何よりも、撮影した本人による熱い語り口が忘れられない。

「この鳥海山は、俺が小学校に通っていたころ通学路から毎日見ていた鳥海山なんだ。」

この角度からの鳥海山が俺にとっては最高の鳥海山なんだ。」

この言葉を聞いた時私は、このワークショップが目指す方向性がはっきりと見えた気がした。町民たちが自分

たちの町を映像で紹介しようとする事の本来の意味はここにあるのだと実感することが出来たのだ。遊佐という町に生まれ育った人が自ら「俺にとって最高の鳥海山」「自分にとって最高の遊佐町」を見つけ出すことさえ出来れば、それを撮影した映像は、どんなプロフェッショナルが、どんな高級な映像機材を使って撮影した映像よりもはるかに説得力を持った映像になりうるはずだと確信出来たのだ。

（３）キャンプ場での、手作りスライド

小中学生の夏休みも終わり、遊佐町の海水浴場の側にある西浜キャンプ場が少し静かになった９月の初め、芸工大の映像コースの学生と遊佐町民による合同映像ワークショップを開催した。昼過ぎにキャンプ場に集合し、学生、町民混合のグループに分かれ、各班ごとに透明ガラスで出来たスライドマウントにキャンプ場周辺で採集したものを挟み込んで抽象的な図柄のスライドを手作りするというワークショップだ。日が暮れて、バーベキューも一段落したころ、松の木からぶら下げられたスクリーンに投影されたスライドは、思いのほか美しく、鳥の羽や海草、中には何やら怪しげなゴミ類まで、とても偶然とは思えない程の造形的な作品に変身していた。このスライドは、翌日ビデオテープに変換記録され、後に「１０８人の笑顔」の短歌のテロップのバックとして使われることになった。自然と戯れながら、映像のメカニズムの不思議とその造形的魅力に触れることの出来たこのワークショップは、映像を使って表現することを、もう一度ゼロから考え直す大変良い機会となったことだろう。

（４）歌人、鳥海昭子さんへのインタビュー

映像制作の面白さに目覚めたメンバーの中には、自分のビデオカメラを買い求める人が１人、２人と出てきた。中には、着物の帯を買うため、旦那さんに内緒で貯めていた臍くりを叩いて２０万円もするビデオカメラを買ってしまったあげく、芸工大の加藤先生から借りていることになっているので宜しくという人まで出てくる始末だ。私の当初の予測を大幅に上回る情熱に圧倒されながら、いよいよ、遊佐町紹介ビデオ本編の制作に取り掛からなくてはならない時期を迎えた。

遊佐町出身の歌人、鳥海昭子さんは、東京在住ながらも、自分の故郷である遊佐町の豊かな自然を数多くの短

歌に詠んでいる。ワークショップのメンバーたちにもファンは多く、私も一度、遊佐町のキャッチフレーズを決める審査会でお会いしたことがあった。

誰からともなく、鳥海さんの短歌を柱にして、全体を構成するビデオ作品にしたらどうだろうかというアイデアが生まれて来たのも、必然的な流れだったように思われる。

やがて冬になり、年が明けた雪の日、東京から鳥海さんをお呼びして、町の代表的な観光スポットのひとつでもある青山邸をお借りして、念願のインタビューが実現した。

聞き手に、最年少の女性メンバーが選ばれたのは、鳥海さんが遊佐に住んでいた時代にそのぐらいの年恰好だったはずとの事から、同年齢の彼女に鳥海さんの記憶の追体験をさせようという思いからだった。

底冷えのする日本海の冬らしい日だったが、囲炉裏を囲んだインタビューでは、遊佐の四季を縦横無尽に思い巡らす豊かな内容のお話を収録することが出来た。

(5) プレミアによるノンリニア編集

いよいよ編集の時を向かえ、スタッフは「阿部スタジオ」に缶詰めになる日々が続いた。「阿部スタジオ」とは、メンバーの1人でもある遊佐町きってのビデオマニア、阿部正雄さんの御自宅のことで、何しろ、最新のビデオ機材が、無いものは無いくらいそろっているのだ。しかも、何年間もかけて撮影した遊佐の自然や伝統芸能の映像ライブラリーとしての機能も合わせ持っていて、この阿部スタジオが無かったら、108人の笑顔は完成できなかったにちがいない。このスタジオで、デジタルカメラで撮影された映像をウインドウズマシンのハードディスクに取り込み、プレミアというデジタルノンリニアビデオ編集ソフトで編集して行く、細かな特殊効果を加える部分では当時、芸工大映像コースの学生で最もプレミアを使い込んでいた黄木優寿君（現大学院生）にオペレーターとして応援を依頼した。

編集中に最も苦労したのは、町のプロモーションビデオとしての最小限の体裁をととのえなくてはならないことだった。メンバーたちはこの頃にはすっかり映像作家としての意識を持ち始めてしまっていて、町の特産品や、観光スポットなどを羅列するようなありふれた映像には感心を持つことが出来なくなっていて、より深く鳥海さんの短歌の世界を映像化しようとする思いが強くなって

来る。一方では、そもそものワークショップの始まりが、町のプロモーションビデオの制作にあったわけだから、それなりのものを期限までに納品しなければならない。更に、これだけは外してはならないという特産品のパンフレット等が、役場から阿部スタジオに届けられたりして、その度に激しい議論が繰り返された末、やっとのことで、落ち着くところに落ち着いたというわけだった。

(6) 「108人の笑顔」上映

「108人の笑顔」と言うタイトルは、遊佐町が除夜の鐘の数と同じ108つの集落からなっている点に注目し、ならば、町民の108つの笑顔を集めようとの趣旨からつけられた。実際に作品の冒頭と、後半部分に108人の遊佐町民の笑顔が収録されている。

そしてついに、期限ぎりぎりの3月30日、無事完成し納品を終え、町が経営する西浜の宿泊施設「ゆらり」で完成試写会を行う事になった。会場には役場の職員や地元マスコミも集まり、作品内容もとても評判が高かったようであった。試写会終了後に完成祝いの宴会となったが、オペレーターとして協力してもらっていた芸工大生の黄木君がやけに感動していたのが印象的だった。遊佐町民の映像制作に傾ける情熱を直に感じ取ったの事と思われたが、彼にとっても大学の中だけでは決して学べない何かを掴み取ってくれたのではと思っている。

その後「108人の笑顔」は、町内外各地で機会あるごとに上映され、2000年度、全国市町村広報ビデオ部門で入賞するなど、幾つかのコンテストにも出品された。2001年6月には遊佐町と友好関係のあるイギリスのストラッドフォードで英語ナレーション版が上映され、山形国際ドキュメンタリー映画祭2001に於いても英語字幕入りのバージョンが上映された。

4. ワークショップの実際（第二期）

2000年4月から2001年3月まで

(1) ワークショップの継続と、ドキュメンタリー映画祭に向けて

「108人の笑顔」が完成したことで、ワークショップの目的は達成されたわけで、ここで本来ならワークショップは終了し、メンバーも解散するのが普通だが、メンバーたちの熱意はこの時まさに絶好調に達していて、とても

解散する雰囲気にはならず、次に何を作ろうか、という話し合いがすぐに始まってしまった。私にとっては、町との契約関係も終了し、毎月一度遊佐町に出かける義務はなくなったわけだが、逆に、義務がなくなった分、町からの制約にとらわれない自由な作品制作が可能になったということでもあり、この際、もうしばらく、遊佐町通いをしてみようという気になったのである。そして今度は、第二期目のワークショップとして、隔年で開催されている山形国際ドキュメンタリー映画祭出品をめざして、長編ドキュメンタリー作品を制作しようという目標を掲げて新たなスタートを切る事になったわけである。

（２）参加者たちへのインタビュー

そしてまず最初に手がけたのは、ワークショップ参加者たちに対するインタビューだった。

私は、この町に定期的に訪れるようになって約１年の間に、とても多くのことをメンバーたちから教えられたような気がする。当然ながら、遊佐町の自然や伝統文化については、何もかも彼らから教えられたわけだが、そういった具体的な知識だけではなく、故郷を思う気持ち「郷土愛」とは如何なるものか？。地域共同体の中で生きていく個人とはどうあるべきか？。東京育ちの私にとってこれまでは、机上の空論であった問題を、すぐに手の届く範囲内にある現実の問題として教えられたように思っている。

私と一緒に映像を作っていこうとしている人たちへのインタビューには、私がなぜこの町に通い続けているかの答えが隠されているはずであり、その答えを映像化することこそが、私が遊佐町を撮る事なのだと思えたのだ。

（３）ピンホールカメラの製作と、撮影、現像

前年に続いてまた９月に、芸工大生を遊佐町に呼んで町民との合同映像ワークショップを行った。今回は、ボール紙でピンホールカメラを手作りし、印画紙をセットして撮影し、キャンプ場に借り切ったコテージの浴室を暗室に改造して、そこで現像までしてしまおうという欲張った内容だったが、夕暮れまでには何とか１人数枚ずつの六つ切り白黒ネガ写真を仕上げる事が出来た。

手作りの素朴なカメラでの撮影体験は参加者たちの映像への興味をいっそう膨らませたことだろう。

（４）鳥海山365日と360度

鳥海山を１年間毎日撮影して、それをコマ単位で編集したらどんな映像になるだろうという定点観測のアイデアもかなり早い時期から話し合われていた。この種のアイデアは思いつくのはたやすいが、実行出来なくては話にならない。そして、実行するための努力は並大抵のものではないのだ。その地道な努力を自ら買って出て、見事１年間通し続けたのは那須正幸さんだった、内装工事の仕事の傍ら、いつも車の中には一眼レフカメラを準備し、自宅近くの眺望のいい橋の上から鳥海山を撮影し続けた。

那須さんの努力を惜しまない気概に触発され、今度は、鳥海山をぐるっと一回り360度から撮影してみようというアイデアが出された。遊佐町から海岸沿いに北上し秋田県との県境を超え、鳥海山の反対側にあたる鳥海町を通して再び県境を越えて戸沢村に達し、後は最上川沿いに酒田港まで下る。そしてまた日本海沿いに遊佐町に戻るという周回コースから鳥海山の見えるポイントを40ヶ所ほどピックアップした。こうして撮影された鳥海山の365日と360度のスチール写真をフィルムスキャナーで、デジタル信号としてパソコンに取り込み、コマ単位で編集した写真アニメーションは、遊佐町民といえども、かつてまだ誰も見たことのない新しい視覚体験を与えてくれた。

５．そして、ワークショップはまだまだ続く

こうしてワークショップの２年目も瞬く間に過ぎ去り、その間に撮影された映像の量は何十時間にも及ぶ、最近ではメンバーたちが映像作品を制作していることが一般の町民の皆さんに浸透して来ていて、何か面白いイベントがある度に、撮影に来てはどうですか？というようなお誘いがかかるようにさえなっている。メンバーたちの撮影技術も目を見張るほど進歩し、もう、私が遊佐町に行かなくても自動的にどんどん素材映像が蓄積されて行くようになって来た。

はたして、この映像をいつどの時点でどのような形にまとめ上げれば良いのか？。もうしばらく、現在の理想的ともいえる制作体制を維持しながら、あまり慌てず慎重に結論を見つけないかと考えている。

6. 映像リテラシーと地域興し

最後に、この遊佐町でのワークショップを通して私が感じた、来るべき新映像時代への予感について触れて、この稿を結ぶことにしたい。

近年、若い女の子たちが作った映像が話題を呼んでいる。数々の映画祭等でも賞を獲得し、それをきっかけに活躍を始めた女性監督も多い。等身大の自分自身を素直な語り口で紹介していく様な素朴な映像スタイルは、これまでの男性主流の映像業界が制作してきた作品群とは明らかに違う新しさを感じさせ、特にビデオの持っているプライベートな特性とあいまって、確実にひとつのジャンルとして認められようとしている。写真の世界に於いても一足先に女の子写真がブームになったことは記憶に新しいだろう。これらの現象は主に、映像メディアの進歩によって機器を手軽に手にすることが出来るようになったことから、これまで映像を使って表現する機会を与えられなかった若い女性たちが、映像による独自の語り口を見つけ出したことによるものだ。メディアの状況が変わることによって、そのメディアを通して伝えられる内容もまた変化してくるの顕著な例のひとつと言えるわけだが、こういった例が沢山生まれてくるのが、これからの来るべき新映像時代だと考える。若い女性たちに限らず、おばさんもおじさんも、老人も子供たちも、これまでの既製の映像の真似ではない自分独自の語り口を映像を使って見つけ出すことさえ出来れば、映像の世界は大きく変わっていくはずだし、その変化はもう既に始まっていると言える。

とりわけ、遊佐町でこのワークショップを通して出会ったおばさんたちには大きな期待を持ってしまう。今若い女の子たちが新映像時代のトップバッターとして続々と映像表現を始め出したわけだが、既にその内容は画一的になりつつあり、表現すべき内容が乏しく感じられるようになって来しまっている。一方、しっかりと自分の人生に根差した生活感を土台に発言しようとしているおばさんたちは、実に多様なメッセージを抱えていて、それを何とか他者に伝えようと努力を惜しまないのだ。この、「中年」または「実年」と呼ばれる女性たちが独自の映像スタイルを持ち得たら、どんなにすごいことになるのだろうか？。少し大袈裟に言ってしまうと、この女

性たちのパワーは日本を変え、世界を変えてしまうぐらい、あるいは、活版印刷の発明に匹敵する位の歴史的な転換期になるのではと思えてしまうぐらいだ。

さしあたり現在遊佐町では、「エキブド遊佐」という女性たちのグループが、地域興しの活動を精力的に続けていて、その中核メンバーが、ビデオワークショップの中心でもある。

映像のリテラシーを身につけた彼女らが、更にもう一歩進んで独自の映像スタイルを見つけ出したとしたら、そしてその独自の映像の語り口に載せて、自分たちのメッセージを全国に、全世界に発信し始めたら、その影響力は、町興し活動の範囲を軽やかに飛び越し、彼女らが生きることの証明そのものへと繋がって行くことだろう。

こういった仲間たちと遊佐町で出会えたことは、私にとってとても大切な財産となった。彼ら、彼女らから学んだ多くの事柄をゆっくりと反芻しながら、私もまた一人の映像表現者として独自の映像スタイルの模索を続けていくことを強く約束したい。

2001年10月2日

108人の笑顔 ダイジェスト

透明な
古代の唄の
声として
湧出る水を
手にすくいたり



残雪の
かたちが種蒔く
じいさまの
二人に見えて
鳥海山



大根の
干し葉が匂う
山形の
山のお日さま
そのまんまです



どおんやりやりやり
ひとつ・
寂々と鳴る
稚児舞う太鼓



河口から
さかのぼりつつ
鳥海山の
万年雪まで
たどれば眠る



残雪の
鳥海山が
早苗田の
まじまに写る
遊佐という町



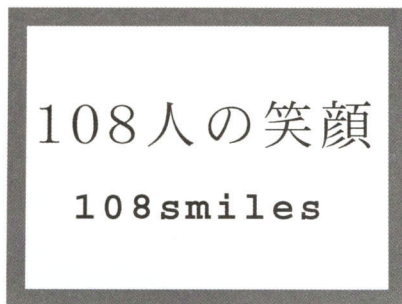
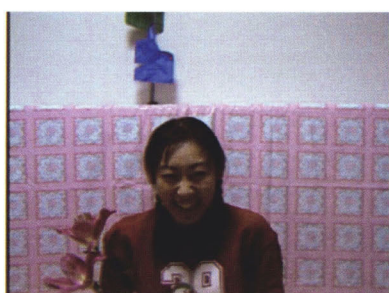
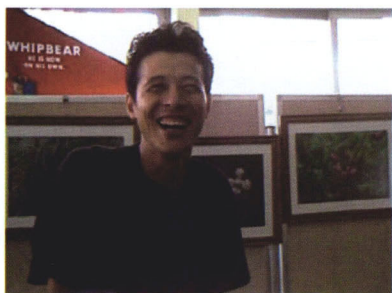


図 2

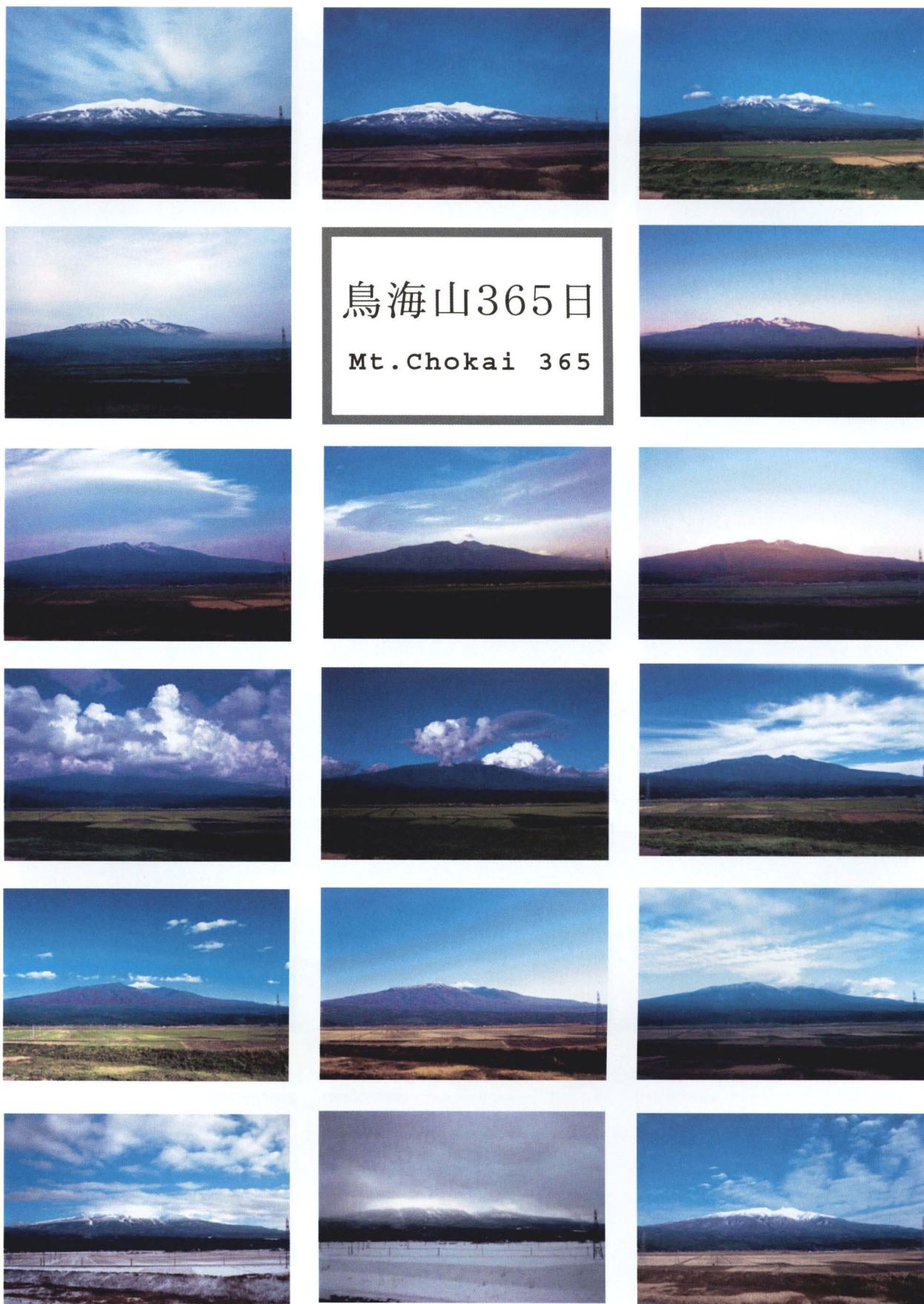


図 3

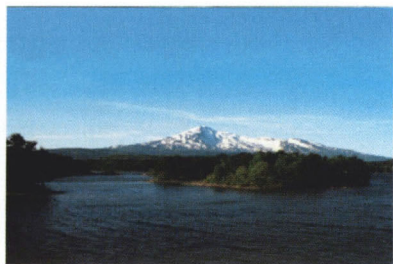
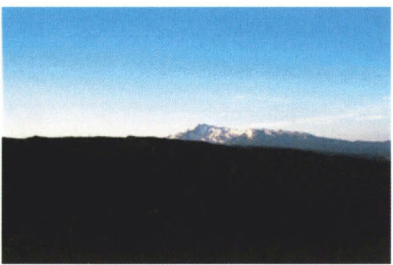


図 4